

## 認知症啓発教育が大学生の認知症高齢者のイメージに及ぼす効果

著者	木村 典子, 青木 葵, 石川 幸生
雑誌名	東邦学誌
巻	43
号	1
ページ	141-152
発行年	2014-06-10
URL	<a href="http://doi.org/10.20728/00000342">http://doi.org/10.20728/00000342</a>

認知症啓発教育が大学生の認知症高齢者のイメージに  
及ぼす効果

木 村 典 子  
石 川 幸 生  
青 木 葵

愛知東邦大学

# 認知症啓発教育が大学生の認知症高齢者のイメージに及ぼす効果

木村典子  
石川幸生  
青木葵

## 目次

1. はじめに
2. 研究目的
3. 研究方法
  - (1) 調査対象
  - (2) 調査方法
  - (3) 認知症啓発授業の内容
  - (4) 質問項目
  - (5) 統計処理
  - (6) 調査期間
  - (7) 倫理的配慮
4. 結果
  - (1) 対象者
  - (2) 認知症高齢者のイメージ 形容詞対の平均値
  - (3) 自由記述「認知症について思うこと」についてテキストマイニング手法による分析
    - 1) 頻出語分析
    - 2) 共起ネットワーク、階層的クラスター分析
5. 考察
6. おわりに

## 1. はじめに

高齢化に伴い認知症高齢者は増加傾向にある。厚生労働省の調査によると、「認知症高齢者の日常生活自立度」Ⅱ以上の高齢者は2010年280万人から2025年には470万人に達すると推計されている。近年、認知症をめぐる問題はあとを絶たない。認知症高齢者が地域生活を継続していくには、保健・医療・福祉のサービスと地域住民の参画による包括的な展開が必要となる。

木村らは、大学生の認知症高齢者へのイメージとその関連要因 (2013)<sup>1)</sup> について研究をした。結果、認知症高齢者のイメージの因子分析の結果導き出された4因子、「尊厳性」「親和性」「俊敏性」「日常性」の平均は3点以下で、否定的評価となった。関連要因として、祖父母との同居の有無、自分が将来認知症になることの不安があがり、祖父母と同居している群の方が、認知症

高齢者のイメージが否定的評価傾向になっていた。認知症高齢者と接した場合の対応の自由記述から多くの学生は何らかの関わりをもととする、したいということがわかった。大学生に認知症高齢者を現実的な理解を促す関わりが必要となり、認知症の病気の理解、認知症高齢者への対応の仕方、認知症高齢者サポートあり方、地域での暮らし方について知識の普及が必要であることがわかった。これらをもとに、大学生に認知症の啓発授業を行った。

認知症高齢者が尊厳を保ちながら、穏やかに、家族も安心してすごすことができる社会をつくるには、認知症の正しい知識を普及させていくことが必要となる。今回は認知症高齢者への理解をすすめるための、教育方法の資料を得るために、認知症啓発授業前後での大学生の認知症高齢者へのイメージの変化を明らかにすることを目的とした。

## 2. 研究目的

認知症啓発授業前後での大学生の認知症高齢者へのイメージの変化を明らかにし、認知症高齢者への理解を進めるための、教育方法の資料を得る。

## 3. 研究方法

### (1) 調査対象

大学で高齢者関連の科目を受講する学生を対象に、認知症の啓発授業前後で、質問紙調査を実施した。調査対象は1～4年生 248人。

### (2) 調査方法

認知症の啓発授業前後で、研究目的を説明し、一斉に無記名式質問紙を記入してもらった。回収はその場で回収するか、もしくは既設した回収ボックスにて、回収した。質問紙の提出をもって、同意を得られたものとした。

### (3) 認知症啓発授業の内容

認知症啓発授業、二回に分けて実施した。一回目の授業では「認知症の理解」、二回目は「認知症高齢者の心と対応の仕方」でおこなった。授業「認知症の理解」の詳細は認知症の中核症状である記憶障害が社会生活、日常生活に及ぼす影響、周辺症状である不安、抑うつ傾向、徘徊、蒐集癖、異食、ものとりれ妄想、失行、暴言、夕暮れ症候群など説明をした。環境、介護者の関わりによって、周辺症状が悪化していく循環を説明した。VTR「老人看護学シリーズ、痴呆老人の看護、痴呆老人の特徴」を視聴した。

授業「認知症高齢者の心と対応の仕方」では、クリスティーン・ボーデン著、檜垣陽子訳の「私は誰になっていくの？ アルツハイマー病者からみた世界」の一節を紹介し、自身が語っている記憶が不確かであることでの不安・混乱する認知症の人の心模様を示した。次に研究者が作成した事例をもとに、認知症高齢者のこころ、対応について考えるようにした。そのあと、高齢者をよくする会・京都制作のVTR「ボケなんか怖くない、グループホームで立ち直る人々」を視聴した。

#### (4) 質問項目

認知症高齢者のイメージ（中野らのSD法における老人イメージスケール）。

認知症について思うことを自由記述にした。

#### (5) 統計処理

認知症のイメージは各形容詞対の平均値を授業前後で算出し、群間の平均値の t 検定を統計用ソフトPASW18にておこなった。

自由記述である認知症について思うことはテキストマイニング手法の統計用ソフトKh coderにて、授業前後で、頻出語、共起ネット分析、クラスター分析をし、比較検討した。

#### (6) 調査期間

2012年10月～2013年1月

#### (7) 倫理的配慮

対象者へ質問紙を配布する際、調査の目的と主旨を説明した後に調査は無記名であることに加えてデータ全体をコンピューター処理するため、個人が特定されることは決してないこと、研究協力は自由意志によるもので断っても不利益を被らないこと、質問紙の提出をもって調査に同意が得られたものと解釈することを依頼文に添えて説明し、調査を実施した。

## 4. 結果

### (1) 対象者

対象者は授業前では248人、授業後で102人であった。

### (2) 認知症高齢者のイメージ 形容詞対の平均値（表1、図1）

認知症啓発授業前は、17項目中、平均値が3点以上の肯定的評価がされたのは、「暖かい－冷たい」(3.06±0.65)の1項目のみであった。一方、平均値の最も低かったのは、「速い－遅い」(2.48±0.69)であった。「速い－遅い」以外の項目は2.5以上3.0未満であった。

認知症啓発授業後、平均値が3点以上の肯定的評価がされたのは、「暖かい－冷たい」(3.06±0.65)、「きちんとした－だらしない」(3.03±0.59)、「良い－悪い」(3.02±0.50)の3項目に増えた。一方、平均値の最も低かったのは、「速い－遅い」(2.48±0.83)であった。17項目すべて、授業前後の変化が有意差の認められる項目はなかった。

表1 認知症啓発授業前後の認知症高齢者のイメージの変化 (SD法)

	授業前		授業後	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
すばらしい-ひどい	2.68	0.60	2.73	0.67
美しい-醜い	2.85	0.50	2.88	0.53
きれいな-きたない	2.92	0.52	2.95	0.47
賢い-愚かな	2.88	0.58	2.92	0.61
良い-悪い	2.96	0.65	3.02	0.50
きちんとした-だらしない	2.89	0.55	3.03	0.59
正しい-正しくない	2.92	0.57	2.98	0.62
速い-遅い	2.48	0.69	2.48	0.83
鋭い-鈍い	2.51	0.70	2.57	0.91
忙しそう-暇そう	2.95	0.73	2.98	0.83
大きい-小さい	2.91	0.52	2.96	0.50
手伝ってくれる-邪魔する	2.76	0.62	2.91	0.68
話やすい-話にくい	2.52	0.79	2.50	0.88
暖かい-冷たい	3.06	0.65	3.09	0.63
嬉しい-悲しい	2.64	0.71	2.59	0.82
元気な-病気がちな	2.74	0.72	2.74	0.80
強い-弱い	2.69	0.70	2.75	0.75
合計	47.41	6.53	48.07	7.03

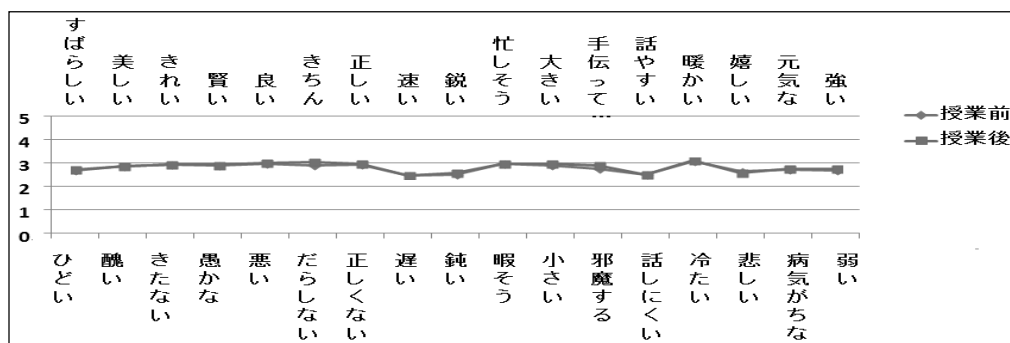


図1 認知症啓発授業前後の認知症高齢者のイメージの変化 (SD法)

(3) 自由記述「認知症について思うこと」についてテキストマイニング手法による分析

認知症啓発教育授業前後で、頻出語、共起ネットワーク、階層的クラスター分析をし、比較検討した。

1) 頻出語分析

頻出語分析では前では抽出語4030、重なり語数602、後では抽出語5800、重なり語数647であった。

形容詞の変化は、授業前では「優しい」「悲しい」「怖い」「恐ろしい」など23種類、授業後では「怖い」「悲しい」「良い」「悪い」など25種類となり、形容詞の数が増した。肯定的な形容詞が前では「優しい」「詳しい」「楽しい」「良い」「粘り強い」5種類、「良い」「優しい」「温かい」「楽しい」「強い」「素晴らしい」「暖かい」7種類であった。(表2)

形容動詞の変化は授業前では35種類、授業後では37種類であった。5回以上の頻出語は、前では「大変」「普通」「必要」「不安」、後では「大変」「大切」「普通」「大事」「不安」「必要」であった。(表3)

サ変名詞の変化は授業前では57種類、授業後では57種類であった。5回以上の頻出語は、前では「認知」「対応」「接」「話」「病気」「イメージ」「記憶」「手助け」「説明」「不安」「理解」、後では「認知」「介護」「対応」「理解」「施設」「病気」「世話」「生活」「話」「行動」であった。(表4)

名詞の変化は授業前では76種類、授業後では87種類であった。5回以上の頻出語は、前では「自分」「家族」「周り」「高齢」「相手」、後では「自分」「高齢」「気持ち」「周り」「症状」「ビデオ」「機会」「祖母」「名前」「老人」であった。動詞の変化は授業前では87種類、授業後では79種類であった。5回以上の頻出語は、前では「思う」「接する」「忘れる」「接す」「聞く」「分かる」「言う」「考える」「話しかける」「話す」「変わる」「覚える」「関わる」「合わせる」「支える」「助ける」「答える」、後では「思う」「見る」「忘れる」「感じる」「考える」「分かる」「接す」「接する」「言う」「聞く」「知る」「驚く」であった。

表2 自由記述 形容詞の変化

形容詞			
前		後	
優しい	19	怖い	10
悲しい	12	悲しい	9
怖い	9	良い	9
恐い	4	悪い	7
多い	4	多い	6
詳しい	3	難しい	6
難しい	3	優しい	3
悪い	2	冷たい	3
楽しい	2	弱い	2
激しい	2	遠い	1
早い	2	温かい	1
良い	2	悔しい	1
汚い	1	楽しい	1
強い	1	強い	1
恐ろしい	1	恐い	1
少ない	1	恐ろしい	1
親しい	1	近い	1
辛い	1	歯がゆい	1
大きい	1	少ない	1
遅い	1	辛い	1
粘り強い	1	切ない	1
忘れっぽい	1	素晴らしい	1
無い	1	早い	1
		暖かい	1
		無い	1

表3 自由記述 形容動詞の変化

形容動詞			
前		後	
大変	21	大変	32
普通	17	大切	10
必要	6	普通	10
不安	6	大事	7
可能	4	不安	6
嫌	4	必要	5
大切	4	かわいそう	4
迷惑	4	元気	4
親切	3	正直	4
丁寧	3	確か	3
適切	3	親切	3
特別	3	身近	3
面倒	3	無理	3
前向き	2	いろいろ	2
いや	1	可能	2
かわいそう	1	急	2
イヤ	1	自由	2
キレイ	1	丁寧	2
安全	1	適度	2
暇	1	迷惑	2
気長	1	あやふや	1
健康	1	いや	1
元気	1	さまざま	1
真剣	1	まし	1
親身	1	ダメ	1
身近	1	緩やか	1
素	1	決定的	1
相応	1	嫌	1
大事	1	孤独	1
大丈夫	1	斬新	1
頭ごなし	1	主	1
不可欠	1	重要	1
変	1	純粹	1
無関心	1	当たり前	1
余計	1	非常	1
		不便	1
		面倒	1



表 4 自由記述 サ変名詞の変化

		サ変名詞					
		前		後			
認知	62	行動	1	認知	132	感謝	1
対応	19	指摘	1	介護	20	看護	1
接	17	自覚	1	対応	20	看病	1
話	15	質問	1	理解	10	記憶	1
病気	12	受け答え	1	施設	9	共感	1
イメージ	8	紹介	1	病気	8	共通	1
記憶	5	心配	1	世話	7	恐怖	1
手助け	5	進行	1	説明	7	自覚	1
説明	5	想像	1	生活	6	実感	1
理解	5	対策	1	話	6	手助け	1
介護	4	対処	1	行動	5	進歩	1
協力	4	認識	1	援助	4	成立	1
世話	4	認証	1	会話	4	接	1
お世話	3	把握	1	びっくり	3	尊敬	1
一緒	3	配慮	1	一緒	3	長生き	1
会話	3	発言	1	感心	3	忍耐	1
発見	3	発症	1	経験	3	熱中	1
否定	3	反対	1	参考	3	発達	1
お話	2	病死	1	授業	3	反応	1
サポート	2	連携	1	進行	3	併発	1
苦勞	2			対策	3	老化	1
経験	2			認識	3		
差別	2			お世話	2		
仕事	2			アルバイト	2		
あたふた	1			イライラ	2		
フォロー	1			安心	2		
メモ	1			運動	2		
扱い	1			存在	2		
意見	1			入院	2		
影響	1			妄想	2		
援助	1			予防	2		
活動	1			イメージ	1		
恐怖	1			トレーニング	1		
嫌悪	1			悪化	1		
誤認	1			扱い	1		
工夫	1			意味	1		
肯定	1			確認	1		

2) 共起ネットワーク、階層的  
 クラスタ分析

頻出語の関係を共起ネット、クラスタ分析で見た。共起ネットで見られている図では頻出語は円が大きく、語と語の関連が強いほど線が太くなっている。

授業前は、「話を聞く」「認知症は大変に思う」「家族・周りが分かる」「忘れるのは悲しい」「優しく接する」「普通に接する」などであった。

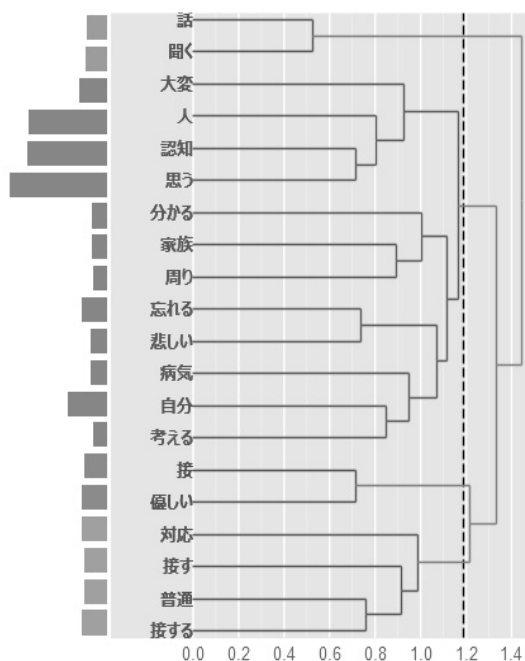


図2 授業前 自由記述 クラスタ分析

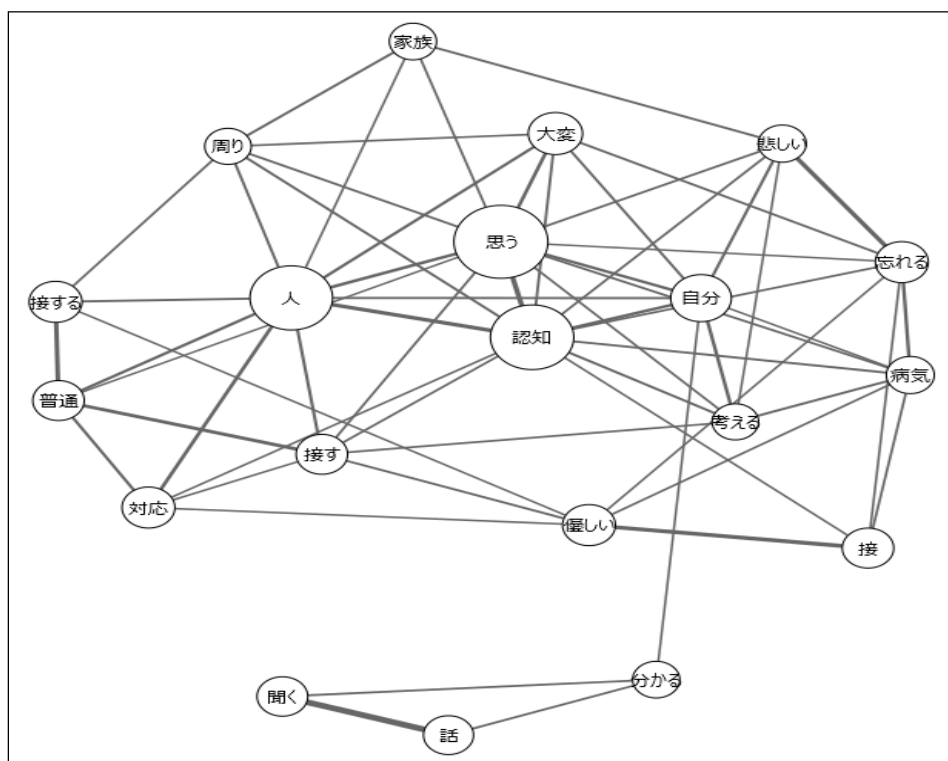


図3 授業前 自由記述 共起ネットワーク

授業後は、「自分、認知症を思う」「高齢介護は大変である」「言ったことを忘れる」「理解することを考える」「対応してみる」「気持ちを分かる」「周りが接する」「大切に接する」であった。

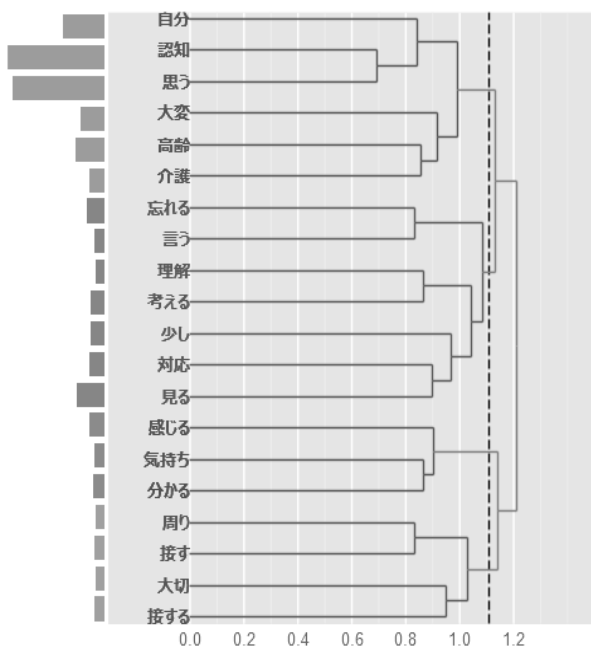


図5 授業後 自由記述クラスター分析

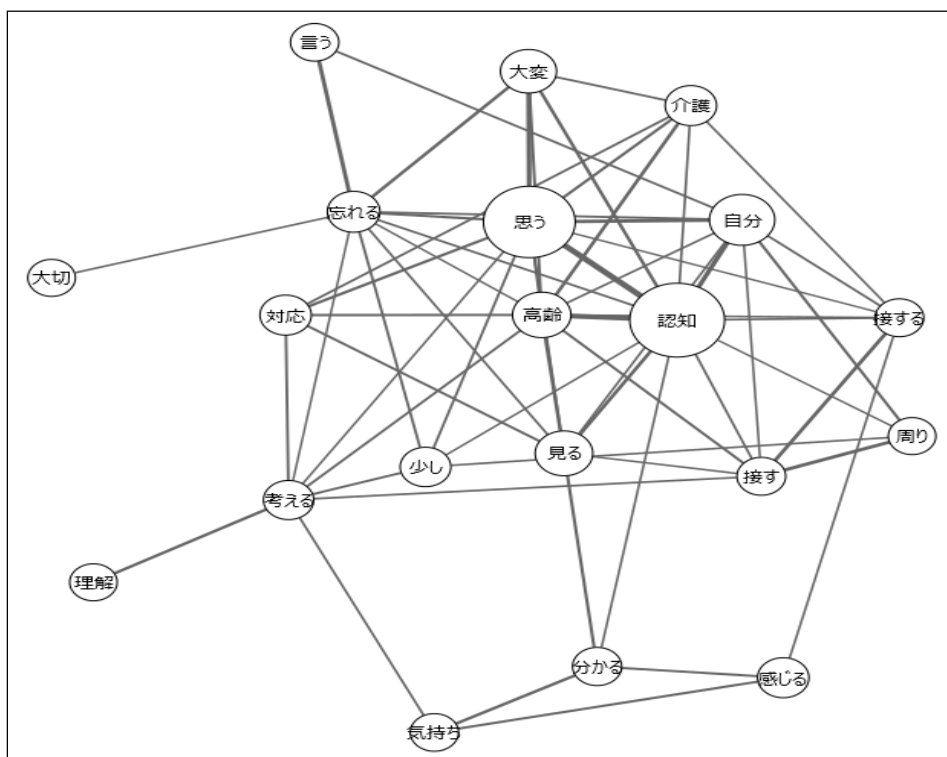


図6 授業後 自由記述 共起ネットワーク

## 5. 考察

木村らの先行研究<sup>3)</sup>の学生の認知症高齢者に関する自由記述から学生は何らかの関わりをもとうとする、したいということがわかった。そこで、大学生に認知症高齢者を現実的な理解を促す関わりが必要と考え、認知症の病気の理解、認知症高齢者への対応の仕方、認知症高齢者サポートあり方、地域での暮らし方について認知症啓発授業を行った。

本研究では、大学生の抱く認知症高齢者のイメージSD法の結果は授業前後で明らかな変化は認められなかった。授業前では17形容詞対のうち、平均値が3点以上の肯定的評価がされたのは、「暖かいー冷たい」の1項目のみであったが、「暖かいー冷たい」、「きちんとしたーだらしない」、「良いー悪い」の3項目に増えた。最も否定的要素は前後とも「速いー遅い」であった。

しかし、自由記述「認知症について思うこと」は、授業後では研究参加人数が少なかったにもかかわらず、語彙数は増加していた。また、自由記述の形容詞の数も、増していた。肯定的イメージを現す形容詞の数も増していた。授業前に学生が書いた形容詞で「優しい」10人が使っていたが、授業後では3人と減っていた。肯定的形容詞であったため、使われ方をみた、前では、「認知症の高齢者に優しく接する」と使われていたが、後では減少していた。後では「認知症高齢者の気持ちが分かる」が増していたため、啓発授業の内容での認知症のこころの理解の必要性が伝わったと考えられる。認知症の理解が深化したと伺えた。他の形容詞で頻度の多い語で授業前に、「悲しい」があった。「悲しい」は記憶を忘れてしまう認知症高齢者の症状に「悲しい」と使っていた。「悲しい」とイメージするのは、認知症高齢者が抱える記憶障害について使われることがわかった。

自由記述が、授業前は、「話を聞く」「認知症は大変に思う」「家族・周りが分かる」「忘れるのは悲しい」「優しく接する」「普通に接する」などであった。授業後は、「自分、認知症を思う」「高齢介護は大変である」「言ったことを忘れる」「理解することを考える」「対応してみる」「気持ちを分かる」「周りが接する」「大切に接する」であった。記憶障害から認知症高齢者への理解、対応の仕方といった内容となっていた。トム・キットウッドの提唱しているパーソンズ・センタードケアは認知症の人の気持ちや立場を理解することから始まる<sup>4)</sup>。共感的理解が大切である。学生の自由記述から、認知症啓発授業の効果があったと考える。

木村らが地域住民を対象に「認知症と聞いてイメージすること」を自由記述にて調査した。「物忘れ」「記憶障害」といった中核症状、「脳委縮」「アルツハイマー」「老化」といった病気・病態、「徘徊」「人格破壊」、「抑うつ」などの周辺症状が主な内容であった<sup>5)</sup>。

村山らが小学生・中学生を行った調査の自由記述「認知症高齢者のイメージ」は、「記憶障害」「言語障害」「病気」「不安・焦燥」となっていた<sup>6)</sup>。

桂ら、吉川らの調査のように看護学生が学年のあがるにつれて、知識が実習などを通して深化すること、介護経験を積むことで、認知症のイメージが肯定的評価に変化としたとある<sup>7)8)</sup>。

今回の認知症啓発教育では、認知症の方の自らの語り、日々の生活がわかるVTRを活用して、認知症理解を促した。実際に、認知症高齢者と接する体験はしていない。教材を工夫することで、

理解を促すことは可能であることがわかった。今後、授業での取り組みとして、認知症の病気の理解だけではなく、認知症高齢者への共感的理解、認知症高齢者への対応の仕方、認知症高齢者サポートあり方の普及が必要であることが示唆された。

## 6. おわりに

本研究では、大学生の抱く認知症高齢者のイメージSD法の結果は授業前後で明らかな変化は認められなかった。しかし、自由記述「認知症について思うこと」は、授業後では研究参加人数が少なかったにもかかわらず、語彙数は増加していた。啓発授業後の記述には「自分、認知症を思う」「理解することを考える」「気持ちを分かる」の認知症高齢者への共感的理解、「対応してみる」「大切に接する」の対応についての記述があった。認知症啓発授業の効果があったと考えられた。

## 引用参考文献

- 1) 木村典子、石川幸生、青木葵 (2013) : 大学生の抱く認知症高齢者のイメージと関連要因、東邦学誌、42、1、75-87
- 2) 中野いく子 (1990) : 児童の老人イメージ、SD法による測定と要因分析、社会老年学、34、11-22
- 3) 1) 前掲
- 4) 木村典子 (2008) : 一般住民の身近に認知症高齢者がいた場合の対応に関する意識、認知症についての知識・不安との関係、愛知学泉大学・愛知学泉短期大学紀要43、89-94
- 5) トム・キットウッド、高橋誠一訳 (2006) : 認知症パーソンセンタードケア、新しいケアへの文化へ、筒井書房
- 6) 村山陽、小池高史、倉岡正高、藤原佳典 (2013) : 認知症啓発授業が小中学生の認知症高齢者イメージに及ぼす影響、テキストマイニング手法による分析、日本認知症ケア学会誌12、3、593-601
- 7) 桂晶子、佐藤このみ (2008) : 看護大学生が抱く認知症高齢者のイメージ、宮城大学看護学紀要11(1)、49-56
- 8) 吉川悠貴、後藤満枝、佐藤佳子、後藤美恵子、加藤伸司、安部哲也 : 認知症高齢者イメージの構造と介護経験によるイメージの差、[www.dcnnet.gr.jp/kaigokenkyu/pdf/sendai\\_h17/s\\_nen](http://www.dcnnet.gr.jp/kaigokenkyu/pdf/sendai_h17/s_nen)

受理日 平成26年3月25日